

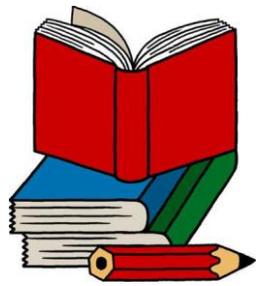
2016年度文化庁委託
「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

「使える」日本語を学ぶ！

活動事例集2016



公益財団法人 **愛知県国際交流協会**



はじめに

愛知県は、東京都に次いで全国で2番目に外国人住民が多い都道府県です(2016年6月末現在)。しかも、永住者、特別永住者、定住者、日本人の配偶者等といった、日本に長く住むと考えられる住民が多く、さらにその子どもや帰化した方など、日本国籍ではあるけれど、ルーツは外国にあるという方も増えています。そして、今後も様々な背景をもつ外国人住民が増えていくことが予想されています。

そうした方たちが日本社会の一員として、安心して豊かな生活をしていくためには様々な課題がありますが、中でも「ことば」の問題は重要です。愛知県内では、各地で、ボランティアによる150以上の日本語教室が開催され、多くの外国人住民が学んでいます。日本で暮らす外国人住民が、日本語ができないために不自由な生活を余儀なくされないことがないように、外国人住民に寄り添い、手助けをすることは、地域の日本語教室だからこそできることではないでしょうか。日本語というツールを使って、「伝えることができた!」「やりたいことができた!」といったように、「できる」ことがたくさんになることが、外国人が日本で快適に生活する上で必要なことだと考えています。

当協会では、外国人が日本語を使ってできることを増やす方法のひとつとして、「行動・体験型教室活動」が有効だと考え、今年度も「行動・体験型プログラム研修」を実施しました。この「行動・体験型教室活動」は、教室という閉じられた空間だけでなく、地域に働きかけて、地域の住民の方と一緒にやって行う活動です。地域ぐるみで取り組むことによって、外国人が「できる!」ことを増やすだけでなく、地域の日本語教室が日本人住民と外国人住民とが繋がる場となっていくと期待しています。

本書は、当協会が実施した「行動・体験型プログラム研修」の中で、参加者が実践した「行動・体験型教室活動」の内容を実践者自身がまとめたものです。「行動・体験型」を実践することで、外国人も日本人も関係なく、みんなにとっての暮らしやすい地域づくりにつながるのでは、と期待しています。

本書に掲載している活動はあくまで事例であり、「行動・体験型」は必ずしもこうしなければならない、というものではありませんが、本書を参考にいただき、「行動・体験型教室活動」を実践していただければ、とてもうれしく思います。

平成29年2月

公益財団法人 愛知県国際交流協会



はじめに

本書のつかいかた

行動・体験型プログラム研修を実施

● 第 1 章 行動・体験型教室活動!?

「使える」日本語とは?	2
「行動・体験型教室活動」のポイント	3
よくある疑問にお答えします	4

● 第 2 章 実践してみました

1. ごみの分別について学ぼう	6
2. 母国にいる親しい人に郵便物を送ろう	14
3. 食品表示の見方を学ぼう	22
4. 自転車のルールを知ろう	30
5. 人を助ける	38
6. AEDを使えるようになろう	46
7. 地震について知ろう	52
8. 地震に備える	58
9. 家庭の防災	66
10. 地震から身を守ろう	74
★実践教室一覧	82

● 参考情報

愛知県の外国人住民	84
教室活動等に役立つウェブサイト	88

本書のつかいかた

● 第1章 行動・体験型教室活動！？

「行動・体験型教室活動」の概要、ポイントについて説明しています。
学習者の状況やニーズ、日本語レベルなどにあわせて、教室活動の流れを考えてみましょう。

● 第2章 実践してみました

10の活動事例を紹介しています。1つの事例は、6~8ページでまとめてあります。事例毎に、実際に実践した内容について、うまくいったこともいかなかったことも、実際に行ったとおりに掲載しています。とりえず掲載してあるとおりにやってみるのもいいですし、「ここはもっとこうした方が…」とアレンジするのも、あるいは事例を参考に他のテーマで挑戦してみるのもいいでしょう。

続いて、活動を実践する前に作成した「活動案」と実践後成果発表のプレゼンテーションをするときに作成した「ポスター」を掲載しています。最初に作成した活動案(活動計画)を基に、研修の中でいろいろ練り込んでから実践しているので、活動案は実際に実践した内容と違っている部分もあります。

テーマ

プログラムを実践した教室の概要

プログラムの参加者

学習者の状況や声を踏まえて目標を設定した上で、プログラムのテーマを決定しました。

活動の「ふりかえり」です。ボランティアで行ったプログラム全体のふりかえりと区別するために「確認」ということばを使っています。学習者とボランティアと一緒に活動をふりかえり、そこで出てきた日本語を確認する時間です。

プログラム全体の流れです。

活動の中で使う教材やワークシートの作成などに加え、活動前に準備したことも挙げています。

1.ごみの分別について学ぼう

教室 : あいち国際プラザにほん語教室
教室開催日 : 土曜日 10:30~12:00
学習者の国籍 : ベトナム、中国、タイ、フィリピン、イギリス、シンガポール、メキシコ、カナダ、コロンビア、各1名
レベル : 入門から初級・中級・上級

参加学習者 : 23名 (中国8名、ベトナム5名、台湾、韓国、フィリピン、タイ、アメリカ、イギリス、シンガポール、メキシコ、カナダ、コロンビア、各1名)
ボランティア : 11名
外部協力者 : 1名 (名古屋市環境学習センター<エコノ(しなごや)>環境教育統括担当)

学習者の状況	学習者の声	目標
<input type="checkbox"/> 名古屋市または近郊在住で、ごみの分別は継続。 <input type="checkbox"/> 専断に任せていて、経験や知識がない人もいる。	<input type="checkbox"/> ごみの分別はむずかしい。 <input type="checkbox"/> 袋の違いがわからない。 <input type="checkbox"/> 「リサイクル」って何ですか？	ごみの分別を理解し、地域のルールに従ったごみの出し方が実践できる。

活動の流れ

1日目: 10月15日(土) 10:30~12:00 (90分)		
活動1	10分	「ごみの分別」に関心を持つ
活動2	40分	地域による違いや経験を話す
活動3	20分	写真を見て、ごみの語をする
確認1	20分	ふりかえりと次回の説明
2日目: 10月22日(土) 10:30~12:15 (105分)		
活動4	50分	目的地まで移動する
活動5	30分	専門家の話を聞く
確認2	25分	ふりかえり
3日目: 10月29日(土) 10:30~12:00 (90分)		
活動6	30分	1・2回目の活動をふりかえる
活動7	20分	「ごみの分別」をやってみる
活動8	20分	分別に関するクイズで確認する
確認3	20分	ふりかえり

事前の準備・下調べ

- 名古屋市環境学習センターに学習受入を依頼し、打合せの後に動向に向く。
- 参加者のごみの集積場や掲示板、リサイクルボックスの写真を持って教材を作成する。
- 分りゲームやクイズの教材を作成する。
- 生活情報パンフレット「なごやの資源・ごみ分別ガイド」(8ヶ国語対応)を取り寄せる。
- 「1.ごみの分別区分見本表(保存版)」を参考とし、内容を確認する。

ここが重要! 日本で生活する上で使える、「行動・体験型」ならではの日本語がたくさん出てきました。



学習者からこんな日本語ができました

活動の中で、学習者から発せられた日本語を拾いました。



次のことばを説明しました

テーマに関連して説明した語彙等(全てを覚える必要はありませんが、活動を進める中で、説明したことばです。)



こんな日本語を伝えました

活動の中で、ボランティアや外部協力者が学習者に伝えたことを挙げました。



ここがポイント

ボランティアが配慮するといいポイントや大切なポイントです。

実践活動

活動1 ごみの分別も関心を持つ

1. ごみの分別(実物のごみで分別の説明を聞きながら)
2. 質問紙、プロジェクトの画面で、16種類の分別名を覚えました。

活動2 地域による違いや経験を話す

いま住んでいる所や自分の国でのごみはいつ、どうやって出すか、ごみ処理の経験などをグループで話し合、発表しました。

学習者からこんな日本語ができました

ごみの分別は何ですか?
ごみでそんなにたくさんある、知りませんでした。

こんな日本語を伝えました

ごみを分けて出します。
分別は住んでいるところで違います。

次のことばを説明しました

ごみの分別、可燃ごみ、不燃ごみ
缶・びん、空き缶、空きびん
空き缶・ペットボトル

学習者からこんな日本語ができました

ごみの分別、したことがありません。
ごみは道路の上に出します。
家前に出します。
アメリカ、大きいごみ箱。

次のことばを説明しました

ごみ置き場・すて場・資源ごみ
どうやって・毎週・思い袋

7

プログラムの詳細です。

活動中、学習者、ボランティアや地域の方たちから発せられた日本語を挙げています。

ふりかえり

活動を通しての感想を発表してもらい、ふりかえりシートに書いたことばや文、思ったことを記入しました。

学習者からこんな日本語ができました

ごみを分けるのは大変ですけど頑張ります。
○先に勉強したことをまたやり直してくれて、忘れたことは思い出して、きくと覚えると思います。ここで勉強したことはとても意味がなくて、私はまた後編に教えるつもりです。
○ごみを分別しようと思います。将来のために。
○自分の箱も守りたいと思います。

ここがポイント

ごみの分別について、実物・ポイント・絵カード・クイズなどで何度も繰り返して学んだことが、分別の理解の定着にも、日本語の学習にも、とても効果的だったと思います。1日だけの学習者にも戸惑いなく参加できたのではないのでしょうか。

実践を終えて～ボランティアの感想 & 大切だと思ったこと

○資料費の削減、協力者や教室内の他のボランティアとの合わせ時間を確保するのが大変だった。
○参加人数が多く、3回続けて出席された学習者もかなりいて、同じ一理解一定量という積み重ねのプログラムを作ったがいがあった。
○3回目に、1回目と2回目の写真を見てふりかえりをしたのがとても良かった。
○時間の時は少しずつ区切って質疑の時間を取っておくと、理解できているかが確認しやすい。
○ボランティアからは入門～初級の人にはついていけない内容という意見が多かったが、学習者の感想は逆であったというものが多かった。

大切だと思ったこと

○協力者や、教室内の他のボランティアとの時間の打ち合わせ。
○内容を簡単にしすぎず、日本人でも覚えて楽しめる内容にする。
○皆で出かけるなど、普段の教室ではない一体感があって、楽しく学習できた。

11

プログラムを実践して、ボランティアが大切だと思ったポイントです。

プログラムを実施したボランティア自身のふりかえりです。活動後毎回、ボランティアだけで活動をふりかえる時間をとりました。

● 参考情報

愛知県内の外国人の状況と特徴を地図やグラフで示しています。外国人の状況は、市町村ごとに異なっています。活動している日本語教室がある地域は、どのような外国人が住んでいるのか、どのような活動が期待されているのか、考える参考にしてください。教室活動などに参考となりそうなWebサイトも掲載しています。

行動・体験型プログラム研修を実施

(公財)愛知県国際交流協会では、2014・2015年度に引き続き、2016年度も行動・体験型プログラム研修を実施しました。6月から11月までの6ヶ月間にわたり、県内10教室、35人のボランティアが「行動・体験型教室活動」の活動案を作成し、実践しました。

「行動・体験型教室活動」とはどんな活動なのかを理解し体感したことももちろん大切ですが、この研修を通して、他の教室を見学したり、同じ教室のボランティア同士でじっくり話し合ったりすることで、自分自身や教室としての活動をふりかえるきっかけになったことが、今後のよりよい活動につながっていくものと期待しています。

回	月日	タイトル	内容
1	6/25 (土)	オリエンテーション 「行動・体験型」の活動とは?	講座の全体像を理解し、受講及び実践などへの心構えを確認する。 防災(地震)をテーマとした活動を例に、「行動・体験型」の活動について理解する。活動テーマの選び方を理解し次回につなげる。
2	7/2 (土)	活動のつくり方 モデル教室見学のオリエンテーション	活動テーマからどのような手順を経て活動をつくるか、「行動・体験型」について、その具体的な活動の流れと素材・教材について理解する。 日本語支援活動における役割と着目点を理解する。
3	7月	モデル教室見学とふりかえり	モデル教室に参加し、ボランティア(対話パートナー)の役割と進行役の役割を理解する。また、自身の実践に向けて必要な事柄について理解する。 <テーマ> ○「交通安全」について学ぼう! ○ あいち国際プラザを利用してみよう!
4	7/30 (土)	実践活動計画を立てる	モデル教室見学をふりかえり、準備する事柄の手順や素材・教材について、また、活動の効果をどう評価するか考える。そして、第2回で学んだことをもとに実践可能な活動案をつくる。
5	8/20 (土)	実践活動計画を共有しよう	各自(各教室)が持ち寄った活動案、素材・教材を共有・検討する。
6	9月～ 10月	実践活動の実施と見学 ※	それぞれの活動現場において活動案をもとに実際に活動し、活動後に見学者とともにふりかえりを行う。 また、他の実践現場を見学する。
7	11/5 (土)	実践活動のふりかえり	提出した活動事例集をもとに実践した活動をふりかえり、文化庁の「カリキュラム案」の考え方と「行動・体験型」の活動について理解を深める。
8	11/19 (土)	実践活動の発表 講座全体のふりかえり	ポスター発表を通して実践活動を共有・検討し、よりよい活動を目指す。 講座全体をふりかえり、今後の活動に向けた実践について考える。

※この冊子では、研修第6回で実践した実践活動を事例集としてまとめています。

第 1 章

行動・体験型教室活動！？



「使える」日本語とは？

● 何のために日本語を学ぶのだろう？

今、愛知県には21万7,465人の外国人が暮らしています(2016年6月末現在)。これは、東京に次いで全国で2番目の数です。最近、日本に帰化する外国人も増えているので、「外国につながりを持つ住民」はそれ以上にいると考えられ、国籍も年齢も背景も異なる様々な外国人住民が、年々増えています。そうした方たちが現在、愛知県内で、ボランティアにより運営される150以上もの日本語教室で日本語を学んでいます。

では、その方たちは何のために日本語を学んでいるのでしょうか？文化庁のことは借りるなら、

「言語・文化の相互尊重を前提としながら、日本語で意思疎通を図り生活できるようになること」

が目的であり、

- 日本語を使って、健康かつ安全に生活を送ることができるようにすること
- 日本語を使って、自立した生活を送ることができるようにすること
- 日本語を使って、相互理解を図り、社会の一員として生活を送ることができるようにすること
- 日本語を使って、文化的な生活を送ることができるようにすること

が目標なのです。

つまり、外国人が日本語教室に通う最終目標は「日本語」という語学の習得ではなく、日本で日本語を使って「自分らしい暮らし」ができるようになることです。「日本語教室で何をやりたいか」ではなく、「日本語を使ってどんなことができるようになりたいか」、そのためには何を学んだらいいのか、という部分に視点を向けてみましょう。

外国人が日本語を使ってできることが増えていくことで、日本人と外国人とがお互いを理解することへの助けとなり、国籍を問わず、すべての人が「自分らしい暮らし」ができる社会の実現に繋がるのではないのでしょうか。地域の日本語教室には、そうした社会の実現のための大きな役割を担うことが期待されています。

● 「使えなければ」意味がない！

「日本語を使ってどんなことができるようになりたいか」は、学習者によってそれぞれです。どんな学習方法でどんな内容で行ったとしても、それが学習者の「自分らしい暮らし」に繋がっているのであれば、問題ありません。一方で、教室で学んだ日本語を教室以外で使うことができないとしたら…。つまり、教室で学んだ日本語が「自分らしい暮らし」に繋がっていないとしたら、せっかく時間を割いて教室で学んだことが活かせないのは、とても残念なことではないのでしょうか。

暮らしの中で「使える」日本語を意識し、
教室で学んだ日本語を実際に学習者が生活の中で使っているかどうか、確認しているでしょうか？



学習者と一緒に目標を立てよう。

多くの地域日本語教室は、週に1回、90～120分ぐらいのクラスを行っています。それ以外の時間には、学習者の多くは仕事をしていたり、子育てをしていたりで忙しく、なかなか日本語の勉強に時間を費やすことができないかもしれません。そうした中で、効率的に学習し、学習者自身がスキルアップをしたという達成感を得て、モチベーションを維持するために、学習者と一緒に「〇〇ができるようになる」という目標を立てましょう。

目標を考えるためのやり取りもコミュニケーションの練習になりますし、目標を立てることによって、日常生活の中で意識的に日本語を聞いたり、使ったりできるようになります。学習者と一緒に考えるのでニーズにも合致しますし、今、何のためにこのことばを学んでいるのか明確になります。そして、「日本語を使ってできること」が一つずつ増えていけば、日本語学習が楽しくなることでしょう。

あるいは、普段の教室活動においてボランティアが学習者と雑談したりする中で、学習者が日常生活の中で困っていることがわかれば、それを取り上げてもいいかもしれません。



地域の方との協働が大切。協力者には、活動の趣旨をきちんと伝えよう。

「行動・体験型教室活動」の目的は、学習者が過ごしている日常生活の中で使われている日本語を理解し、使えるようにすることです。そのためには、教室のボランティアだけでなく、地域のいろいろな方たちとのコミュニケーションを図ることが大切です。その時、相手が外国人だからといって、必要以上にゆっくりと簡単な日本語を話されても、「行動・体験型教室活動」の中では意味がありませんし、あまりにも専門的な難しい話をされても学習者は嫌になってしまいます。

地域の方と協働するときには大切なのは、あらかじめ、プログラムの目的や趣旨をきちんと理解していただいた上で、学習者の人数や日本語レベル、目標、プログラム全体の流れなどきちんと伝えておくことでしょう。資料や映像、テーマに関連した書類等、どんなものがあるのかについても打合せしておく必要があります。

また、学習者がついて行けない場合は、途中で区切らせてもらい、ボランティアが学習者に寄り添って、理解を助ける時間をとることも大切です。



行動・体験した後のふりかえり(確認)が重要。そこで日本語が定着する。

「行動・体験型教室活動」はあくまで日本語学習です。行動・体験することや情報を得ることだけが目的ではありません。

行動・体験した後に学習者とボランティアが一緒に行うふりかえり(確認)の時間がとても重要です。ふりかえり(確認)をすることで、行動・体験したことや、そこで出てきた日本語が定着します。

活動の様子を写真やビデオで撮ったり、出てきた日本語を記録したりして、行動・体験しているときにどんなことが起こったか、どんな日本語が使われていたか、後で学習者が思い出せるようにしておくといでしょう。

また、ふりかえり(確認)のときは、できるだけ、学習者が発言できる機会を増やすようにしましょう。

♡ もっと理解を深めるために ♡

当協会が2015年2月に作成した『「使える」日本語を学ぶ!～行動・体験型の教室活動をつくろう～』では、「標準的なカリキュラム案」や活動をつくるプロセスなどについて詳しく説明しています。あわせてご活用ください。(P.88参照)





すでに教室でいろんなイベントをやって、学習者はいろいろ体験しています。

「行動・体験型教室活動」は、単に何かを体験することを目的としているわけではありません。

学習者が日本で生活する上で「できるようにになりたいこと」「できるようになるといいこと」を踏まえてテーマを決めることが大切です。「お城でも見に行こうか」「みんなで日本料理食べに行こうか」…とは違うのです。

そしてもう一つ大切なことは、行動や体験の中で出てきた日本語やできるようになったこと、わからなかったことをきちんとふりかえって学ぶことです。「楽しかったね」で終わるのではなく、「あの時、お店の人はこんなことを言っていたけれど、どういう意味?」「ああいう場面では、どう言えばいいの?」などのふりかえり(確認)を学習者と一緒に行うことが、実は一番重要なのです。



上級者ならいいけれど、初級者には無理なんじゃないの?

そんなことはありません。初級者も、日本ですでに生活しているわけですから、むしろ初級者こそたくさんテーマを選ぶことができるのではないのでしょうか? もしかしたら明日、大災害が起こるかもしれません。その時、どんな日本語レベルの外国人でも、身を守ることができたり、助けを求められることができるための日本語が必要となります。

行動・体験自体は、初級者も上級者も一緒にできます。ただ、行動・体験したあとのふりかえり(確認)は、レベルごとに分けられると、いいでしょう。また、レベルに幅がある場合は、初級者に合わせた活動にするといいかもしれません。その上で、上級者が初級者をフォローしたり、ボランティアが学習者のレベルに合わせて内容をふくらませたりできるといいですね。



行動・体験型は学習者のニーズに合っていない。

学習者に「何を勉強したい?」と聞いたら、「文法」「漢字」「試験」…と答えると思います。では、「何ができるようになりたい?」と聞いたらどうでしょう。「漢字を勉強したい」という学習者にその理由を聞くと、「スーパーで食品の説明や表示を読んで、きちんと選べるようになりたいから」と言われたことがあります。この場合、漢字をテキストに沿って学ぶより、スーパーのチラシを一緒に見て学んだりの方が、ニーズには合いますね。一方で、学習者が「できるようにになりたいこと」を意識していない場合もよくあります。ボランティアが、学習者の「できるようにになりたいこと」を引き出すことも大切でしょう。



行動・体験型は体験をしないといけなくて、準備が大変…。

名称から誤解されてしまいがちですが、「行動・体験型」は必ずしも、どこかへ行ったり、何かを体験しなければいけない活動ではありません。大切なのは、日本で生活する上で何かができるようになるための日本語を学ぶということなのです。

例えば、町内会で配られる「お知らせ」を活用するなど、普段の生活に即したものにすれば、それも「行動・体験型」になります。要は、「This is a pen.」のような日本語ではなく、日本人が普段使う、暮らしの中で必要な日本語を学びましょう…ということなのです。



教室以外の地域の人に協力を頼むのは大変…。

「行動・体験型」は教室の中だけでもできますが、地域の方が活動に加わるとより効果的です。教室のボランティアと、教室以外の日本人の話し方は大きく違います。それを体感するだけでも、大きな「体験」になります。

また、地域の人に教室へ入ってもらった場合、お互いが考えていたことや勘違いしていたことを理解し合うきっかけになります。行政へ出前講座をお願いした場合は、行政側が外国人対応を考えるきっかけにもなるかもしれません。最初はお互いに慣れなくて大変かもしれませんが、そういった橋渡しの役割ができることが、地域日本語教室の強みではないでしょうか。

ただ、話が難しく学習者がついていけない場合などは、途中で区切ってボランティアがフォローするなど、工夫をする必要があります。



教室として決まったやり方があるし、新しいことは取り入れにくいなあ…。

学習者にとって一番必要なことはなんだろう?ということも、もう一度考えてみましょう。その結果、「行動・体験型」がいいということであれば、自分たちの教室に合わせたやり方で一部を取り入れてみてもいいですし、今までの方法がいいということになれば、それもアリだと思います。この冊子に掲載されている事例は、研修の一環として、外部協力者と協働したり、3日間で開催したりしていますが、必ずしも全てを取り入れる必要はありません。教室にとって、そして何よりも学習者にとって、どんなやり方がいいか、ボランティア同士、あるいは学習者も含めて、いろいろ話し合ってみると、新しく気付くことがあるかもしれません。